

国立駅舎の みどころ紹介

国立市建設部まちづくり推進課 作成
平成18年10月7日

えんかく 国立駅の沿革

国立駅は、当時の東京商科大学（現在の一橋大学）との契約にもとづいて、箱根土地（現在のプリンスホテル）が建築し、鉄道省（現在のJR東日本）に寄付した請願（せいがん）駅でした。駅は大正14年に着工され、大正15年4月に開業しました。民間が建設し、請願した駅事例は全国でも希少な事例です。

開業当初、「赤い三角屋根に白い壁」という典型的洋風モデルの駅は、箱根土地の開発した分譲地（国立大学町）の玄関口として「広告塔」や、文化的なまち国立をイメージするデザインとして、分譲広告には駅の写真が必ず大きく掲載されました。



(国立大学町分譲地) 国立駅開業時

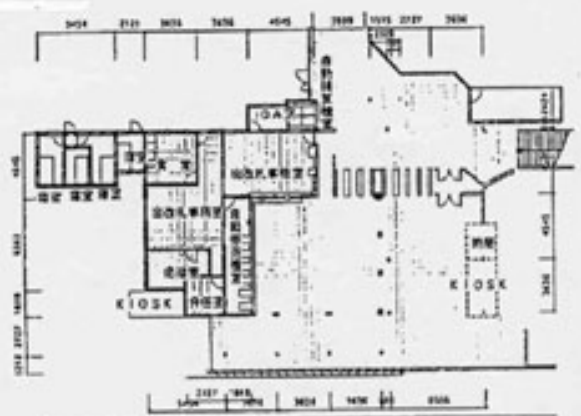
● 開発当時の駅と駅前広場



複製平面図 (大正15年)

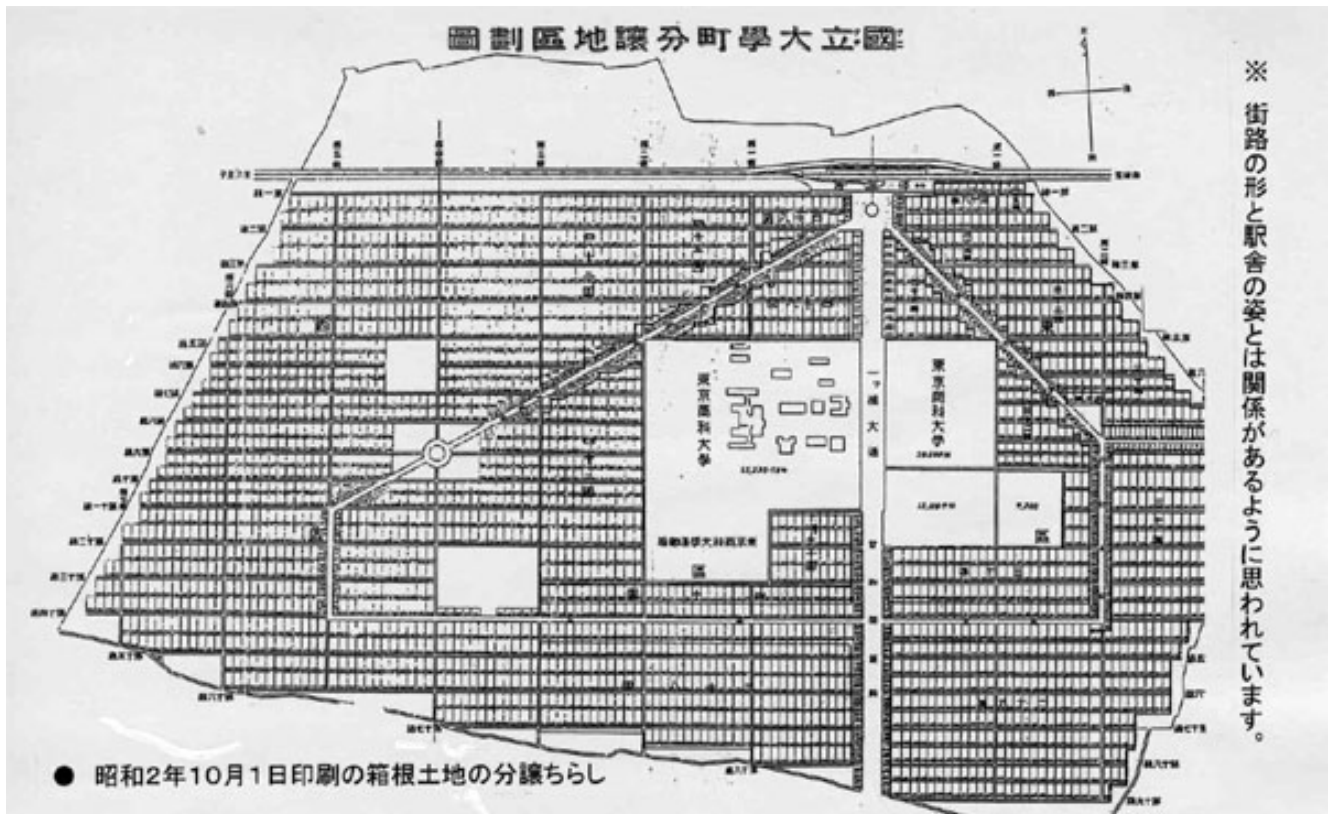


● 現在の駅と駅前広場



平面図 (平成2年以降)

● 間取りの変遷



国立駅の現況

① 配置

国立駅舎は駅前広場に面し、大学通りの中心線よりわずかに東にずらして配置しています。国立駅舎の正面外観が対称形ではないように、わざとシンメトリーを崩したものと思われる。この配置は大学通りからの景観に配慮したものとなっています。

また、国立がややくぼ地になっていることを活かし、ホームを高くして下に連絡通路を置く「地平駅」としてしています。これにより大学通りから見たときに跨線橋（こせんきょう）が駅の背後に現れず駅舎が目立つ配置となりました。

② 間取り

国立駅舎は間口9間（約16.4m）×奥行7間（約12.7m）の本屋に4間（約7.3m）×2間半（約4.6m）の改集札口が接続しています。当初の間取りは、間口5間（約9.1m）×奥行4間半（約8.2m）の広間を中心として、西側に出札室、手荷物扱所、駅長室、保管室、宿直室等の業務部門が置かれていました。広間北東にある改札の北側が、東側へ大きく張り出した改集札スペースとなっています。また、これに連絡する形でホームへ至る渡り廊下が設けられていました。広間は腰掛けが置かれるなど、出札、改札と同時に待合室の機能を持っており、幅2間（約3.6m）の両開戸と大壁に囲まれた空間でした。

昭和41年にホームからの連絡階段設置にともない、広間の正面～南東の壁・扉を撤去しました。

その後、自動改札機の導入と乗降客増により、広間東側の壁も撤去され、コンコースが拡張されるなどの大幅な改装が行われました。業務部分も大幅に改装され、手荷物扱所、出札室の縮小があり、事務・共用スペースが広がりました。

しかし逆にみれば、現在の国立駅は、大きな機能の変化があってもかわらず、基本的な柱配置は変えず、外観に大きな影響を与える改装は行われていないこととなります。

国立駅の構造・意匠（デザイン）

①構造

国立駅舎は木造平屋、大壁で現在は天井が貼られ、軸部の確認が難しくなっていますが、本屋の小屋はキングポストトラスの洋小屋で、壁軸部は4寸柱の間に3尺間隔で間柱を入れ、木摺（きずり）を打って大壁としています。なお、ひさし部分は古レールが柱に用いられています。

前面ひさし部には柱が4本立っています。西側から順に、

(a) 一番西側の柱

- ・南（外）側柱：〔UNION〕の標記を確認。ユニオン社はドイツを代表する製鋼所である。
- ・北（内）側柱：〔CARNEGIE〕の標記を確認。製造年〔18〇〇〕。カーネギー社は鉄鋼王アンドリュー・カーネギーによって創立された製鉄会社。これが母体となりUSスチールが設立。

(b) 西から二番目の柱

- ・南（外）側柱：〔CARNEGIE 1905 ET〕ETはカーネギー社エドガートムソン工場の頭文字。
- ・北（内）側柱：〔UNION D 1887 W.T.K.〕Dはドルトムント製鉄所製造のもの。

(c) 西から三番目

- ・南（外）側柱：〔〇〇〇〇 ILLINOIS STEEL Co SOUTH WKS 1898〕
- ・北（内）側柱：不明

(d) 一番東側の柱

- ・南（外）側柱：不明
- ・北（内）側柱：〔BV & Co 1888〕イギリスボルコウ・ボーン

また、現在の駅コンコースの真ん中には柱が1本立っています。

- ・南（外）側柱：〔ONO 1914 V〇〕
- ・北（内）側柱：〔CARNOGIE 1900〕

②意匠（デザイン）

古写真等から外観意匠を復原すると、建築当初は屋根窓が4カ所あり、本屋妻面の両端に角半柱が取り付けられていました。半円アーチ窓は木製の銀杏型の棧（さん）が入れられ、周囲には3段の化粧タイルによる枠が回されてきました。広間南、東には壁がまわり、中央に玄関口、左右に上げ下げ窓を配し、英国レッチワースの駅舎に似た住宅風デザインでした。大きなアーチ窓はロマネスク風であると同時に、多様なデザインを導入しつつ、全体を純粋な三角形の形態でまとめており大変個性的です。なお、屋根窓は昭和45年、柱型は昭和27年までに滅失しています。

参考資料：平成12年発行「国立駅周辺プラン報告書」国立市

平成5年発行【藤原 惠洋「国立駅のレール柱（『多摩のあゆみ』第70号）】

平成12年発行「くにたち：商店街形成史—国立大学町を中心として—」国立の自然と文化を守る会編

◎ 国立市ホームページもご覧ください (<https://www.city.kunitachi.tokyo.jp>)

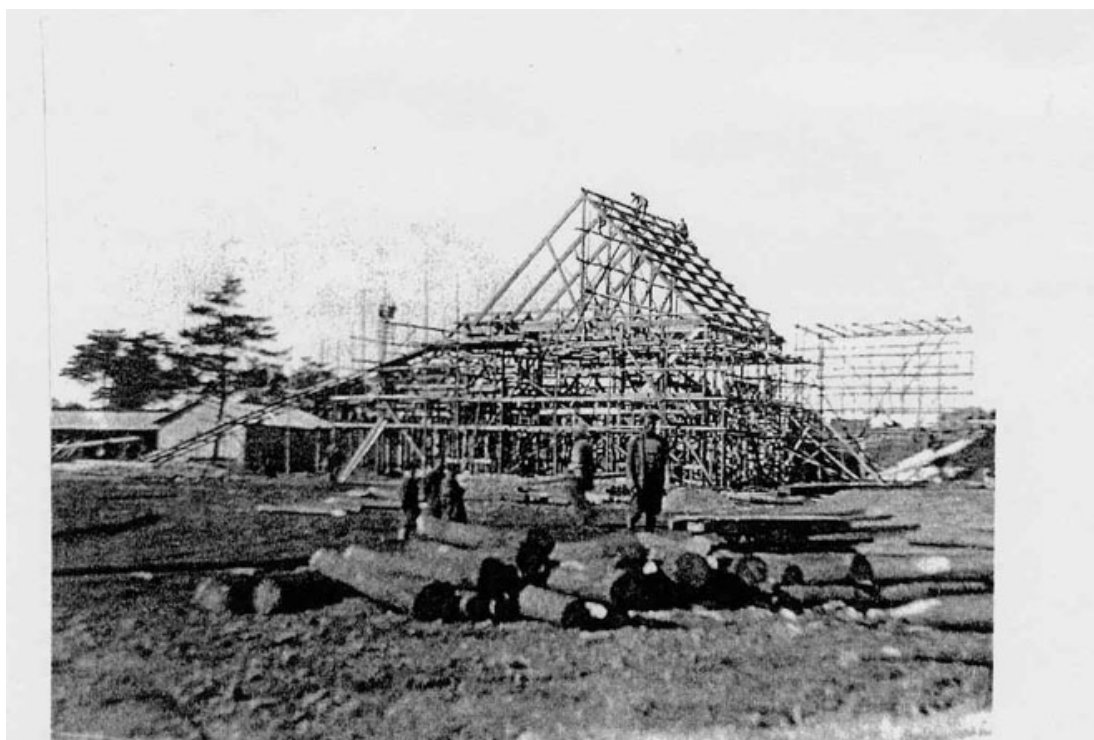
『国立市トップページ⇒くらしの情報(国立駅周辺)⇒国立発 駅を活かしたまちづくり』



● 国立市が保管する主な部材

◎ 国立市で保管する国立駅舎の部材リスト

- ① 構造部材 木造軸組み（柱・梁・合掌）、ひさし、東側下屋レール造部分（柱・梁）
- ② 化粧材 正面丸型飾り窓（枠共）、駅名標、飾換気ガラリ（枠共）、角型飾り窓（枠共）、正面ひさし幕板（下地があれば下地を含む）、屋根瓦は劣化が想定されるため一部のみ
- ③ その他 外壁、野地板は一部のみ



● 建築中の国立駅舎 『くにたち:商店街形成史』より引用